

学生の地域子育て支援ひろばへの参加による 心理的变化とひろば自体の変化に関する考察 (その1)

馬見塚 珠 生 竹之下 典 祥

学外にある地域の子育て支援ひろばに演習で参加した学生、ならびに支援者、利用者に関する調査研究を行った。今回、学生に特長的にみられた変化として、乳幼児、母親、支援者との交流を通して自己理解が深まり、自我同一性獲得のきっかけが与えられた。

また、ひろばを通じて母親や支援者と相互関係を形成する成果もみられた。こうした変化は、地域のひろばに一定期間継続的に演習参加した結果と考えられる。

キーワード：子育て支援、ひろば、自我同一性、エコシステム、触媒としての学生

1. はじめに

(1) 問題意識の所在

わが国では、戦後の急速な都市化や核家族化の進展により、本来、社会的な営みとして行われるべき「子育て」がすべて母親の手に委ねられ、孤立無援の中、最悪の場合には虐待にも至ってしまうようなケースが後を絶たなくなった。

こうした「子育て」をめぐる環境の激変に伴い、1990年の「1.57ショック」に象徴されるように少子化が進行していった。2003年より「少子化社会対策基本法」「次世代育成支援対策推進法」が制定、さらに「子ども・子育て応援プラン」が策定され、子どもを社会全体で育てていく国の責任が明記されるに至った。

このような社会変化の中、保育士や幼稚園教諭という専門職に求められる資質にも、新たに「地域子育て支援」の視点が加わり、その社会的要請がますます強まってきている。保育士養

成の短期大学においては、さまざまな「子育て支援力」の育成を図るカリキュラムの開発が進められている¹⁾。

京都文教短期大学（以下、「本学」という）においても、2007年には「子ども未来コース」が新設され、学生の「子育て支援力」養成を図る一環としての「子育て支援活動」の演習授業が行われた。その概要については既に本稿著者の一人、竹之下ほか²⁾によって報告を行っている。「子ども未来コース」は2009年の学科再編に伴い、「幼児教育学科」に一本化されたが、2年間にわたって行われた初の試みである「子育て支援活動」を検証しておく意義は大きい。

(2) 授業設定の経過

子ども未来コース1期生が、1年生後期に「子育て支援」の講義を履修。その履修生で単位取得した者のなかで、演習を希望する学生22人が「子育て支援活動」を履修登録し、宇治市内外5ヵ所の「地域子育て支援ひろば」に参加した。

演習先は、①「宇治市地域子育て支援基幹セ

ンター」併設のげんきひろば、②まきしま Move、③赤ちゃんサロン・広場、④アウンジャ、⑤本学「宇治橋通りサテライトキャンパス」子育て応援広場の5ヵ所で3人1組を基本として前後期1ヵ所で計2ヵ所を体験した（③は前期のみ、⑤は後期のみ）。

(3) 本稿の目的

本研究では、「子育て支援活動」を通じて、1) ミクロレベル、メゾレベルでどのような変化が生じたのか、2) この授業が子育て支援者を育成する上でどのような意義があったかの検証を試みる。

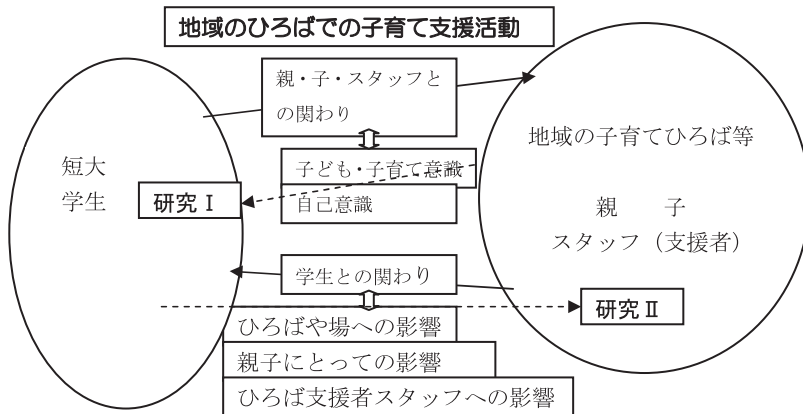
第1にミクロレベルでは、この授業を受けた学生自身が何を学び、どのような意識変容が見られたかの検証を試みる。思春期青年期の中高生や短大生などの保育園での保育体験による意識変容に関する研究は多いⁱ。また短大や大学付属の子育て支援センター等での地域連携についての報告も見られるⁱⁱ。しかし、子どもと親がともに過ごす地域のひろば等での保育系短大生による支援体験を通じた意識変容に関する研究はそれほど多くはないⁱⁱⁱ。

「子育て支援力」の一つは「親支援力」を高

めることであり、そのためには、できるだけ親子の生活圏内に近づき、親の置かれている現状や親の立場を学生の段階でいかに実感として理解するかが重要と考える。

その意味で、地域で運営されているつどいのひろば等で学生が親子に出会うことを通して得られる学びは大きいと推察する。下村、桶水(2004)は、保育系短大生が子育てひろばでの支援体験を通して子育てや親への意識を変化させていることを報告している³⁾。体験前後でより現実的な子育て観へと学生の意識が変容し、親との関わりについても、学生の自発的な問題提起や意識の芽生えが観察されている。更に、「学生たちが親子に積極的に関わる体験を積み重ね、自信をもって保育の現場に出て行かれるような地域連携型援助体制の枠組みを、ネットワークと大学が協力して作っていくことの有用性」についても示唆している。

しかし、学生の活動はわずか2回(合計6時間)であり、学生が親との関わりを深めるには時間的にも制約があったとの指摘もされている。本学の「子育て支援活動」では、1箇所のひろばへ週1回継続的に5回ずつ入り(計30時間)活動を行った。そのため、ひろばでの親子やスタ



【図1】 地域のひろばで学生と親子、スタッフが相互に及ぼしあう関係性と効果の作業仮説

ップとの関りの変化、および学生が受ける影響もより大きく認められるであろうと予想された。

まず<研究Ⅰ>では、学生が子育てひろばに入ることで、何を学び、どのような意識の変化を経験したのかを明らかにすることを目的として、学生自身の内的心理変化＝マイクロレベルでの変化を分析する。<研究Ⅰ>は授業担当者の馬見塚が執筆する。

次に、メゾレベルの視点から、この授業の意義の検証を試みる。子育てひろばの支援者（スタッフ）と利用者（母親）に対し、インタビュー等による質的評価の聴取を行った。これを<研究Ⅱ>とし、学内外コーディネイトを担当した竹之下が執筆する。

上記のことを進めるにあたっての作業仮説として、【図1】のような関係性や効果を想定した。

2. 方 法

<研究Ⅰ>

- ・手続き1：「子育て支援活動」を履修した学生22名を対象に、前期演習開始前4月末と、終了後7月末に同一の質問紙調査を実施。質問紙は、対児感情尺度（花沢、1992）、子ども・子育てに関する意識尺度（伊藤、2006）、自尊感情尺度（山本他訳、1982）、一般不安質問紙の4尺度から構成されたものを配布、回収^{iv}。それぞれ得点化して得点差の統計的検定を行った。
- ・手続き2：更に、演習前後で尺度得点の差が特に大きかった学生4名にインタビューを実施し、意識変化についての聞き取りを行った。
- ・手続き3：2008年12月に本学にて行われた「第2回子育てシンポジウム」で活動報告した1

期生3名のプレゼンテーション内容⁴⁾の分析を行った。

<研究Ⅱ>

- ・手続き1：子育て支援活動で実際に関わって頂いた主宰スタッフに半構造的質問形式で、意見聴取を行った。
- ・手続き2：広場の利用者で月齢の異なる子育て中の母親に学生参加の感想文を記述してもらった。

3. 結果と考察

(1) 研究Ⅰ

1) アンケート分析とインタビューの分析

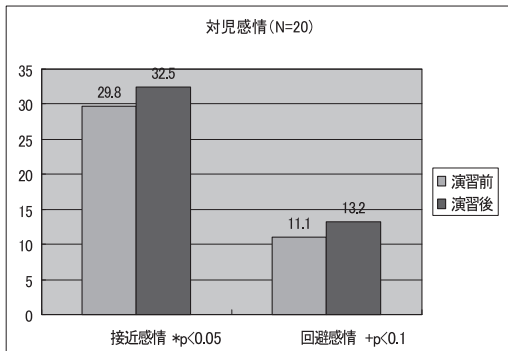
22名の学生のうち有効回答は20名だった。【表1】に対児感情、子ども・子育てに関する意識、自尊感情の得点の平均値、標準偏差および、活動前後での得点差のt検定を行った結果を【表1】に記す。またこれらの得点比較をグラフ化したものをそれぞれ【図2】、【図3】、【図4】に示す。

対児感情の接近得点は、 29.8 ± 6.20 から 32.5 ± 5.34 へと有意に増加した ($p=0.03$)。回避得点も 11.1 ± 6.91 から 13.2 ± 7.45 へと有意に増加した ($p=0.09$)【図2】。乳幼児と接する機会を持ったことで、赤ちゃんを受け入れるやさしい気持ちがより高まった一方で、現実の子育てや親子の関わりを見て、子育ての大変さや難しさも同時に感じたことが、回避得点の上昇につながったと考えられる。

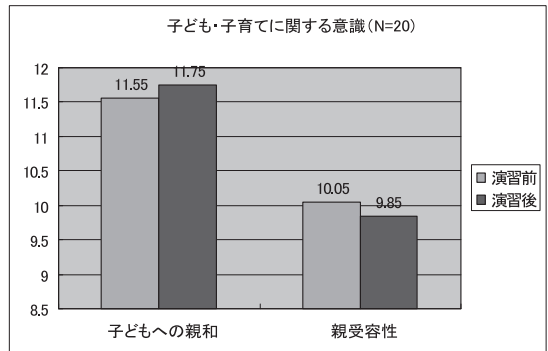
子ども・子育てに関する意識の子どもへの親和感情得点は、 11.55 ± 0.76 から 11.75 ± 0.55 とわずかに増加した ($p=0.21$) が有意差はなかった。また親になることへの受容性得点は、 10.05 ± 1.10 から 9.85 ± 1.14 と減少 ($p=0.26$)、ただし有意差はみられなかった【図3】。有意差は出な

【表 1】 各尺度の因子別得点の平均値、標準偏差、有意確率 (N=20)

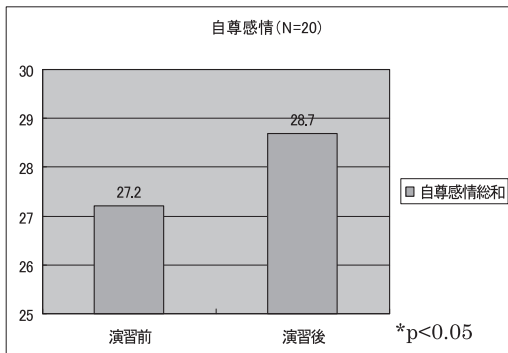
尺度	因子	平均値	標準偏差	有意確率 (p)
対児感情	前接近得点	29.80	6.195	.030 *
	後接近得点	32.50	5.539	
	前回避得点	11.10	6.805	.085 †
	後回避得点	13.20	7.452	
子ども・子育てに関する意識	前子親和性得点	11.55	0.759	.214
	後子親和性得点	11.75	0.550	
	前親受容性得点	10.05	1.099	.268
	後親受容性得点	9.85	1.137	
自尊感情	前自尊感情得点	27.20	3.679	.014 *
	後自尊感情得点	28.70	3.908	



【図 2】 対児感情 (N=20)



【図 3】 子ども・子育てに関する意識 (N=20)



【図 4】 自尊感情 (N=20)

かったものの、活動後に親受容性が若干減少したのは、回避得点の上昇と考え合わせて、やはり現実の子育ての大変さ難しさを知ったことによる影響と考えられよう。

自尊感情得点は、 27.2 ± 3.68 から 28.7 ± 3.91 へと有意に増加した ($p=0.01$)。特に、「自分をもっと尊敬できるようになりたい」という項目で最も高い有意差が見られた ($p=0.03$)【図4】。

これらの変化の中身を更に詳細に検討するために、変化の大きかった学生4名を選び、インタビュー調査を実施した結果を以下に示す。

・事例A：活動前は接近得点ほぼ満点、回避得点ほぼ0から活動後には回避得点が13点上昇した事例

子育て支援の演習に行くまでは、乳児を見ることはあったけど、関わる機会がなかった。だから赤ちゃんはかわいいというイメージしかなかった。でも、赤ちゃん広場に初めて来たお母さんが、赤ちゃんが離れないのでトイレにも行けなくて、数秒さえも離れられないのを見て、大変だなあと感じた。

現実の赤ちゃんを見て、ただかわいいだけではないということを知り、また現実の子育てを目の当たりにして、子育ての大変さ難しさを体で感じたことで、「自分の中に描いていた子育て観」から「現実の子育て観」へと意識が大きく変化したものと思われる。それが回避得点の上昇という形で現れているものと考えられる。子育てネットワークとかち(2004)の報告にも、同様のことが指摘されている。

・事例B：接近得点+12点増加、回避得点-6点減少した事例

子育てを間近に見て、大変そうだけど赤ちゃんがほしいと思うようになった。演習に行っ

てよかったことは、赤ちゃんの成長はすごい！とわかったこと。それからママたちいっぱい質問して子育ての現状を教えてもらったこと。

<演習前後で自覚する変化は？>

今すぐにでも結婚して赤ちゃんがほしいと思うけれど、でも、まずはもっと社会をわかってからでないとダメって、思うようになった。計画的に人生考えた方がいい。自分が子どもたちに尊敬される人間になりたいと思う。就職も、保育士免許がないからとあきらめていた保育園だったけど、他の職種で就職することもできるのなら、チャンスだと思う。働いてみて本当に自分に合っていると思ったら、また勉強してそのときこそ資格を取ればいい。

赤ちゃんとの継続的な接触体験を通して、赤ちゃんの成長力のすごさを目の当たりにして、素直に感動したことが接近得点の上昇に表れている。また赤ちゃんを知らないゆえに、やみくもに回避感情が高まっていたが、活動後には平均的数値に下がっている。母親たちとさまざまな話をしたことを通して、自己理解が深まり、結婚、妊娠、出産、仕事に関する将来展望を、「計画的に考え」長期的なビジョンを持つことの重要性に気づいた事例である。

藤後ら(2005)は、中高生は保育体験で子どもに対する興味や関心が増すと同時に、自己の生き方について考えるようになるという報告を行っている。更に、「現在の多くの青年が、大人への成長に不可欠な役割モデルの存在を必要としながら、そうした出会いが得られないままに成長を余儀なくされている多数の青年が存在する」と指摘している。事例Bが、赤ちゃんとの出会いと母親という同性の役割モデルとの出会いの両方から自己理解を深めていったものと

推察する。次の事例C、Dでもこの点がより明確になっている。

・事例C：自尊感情得点+6点と大幅上昇した事例

演習前後で自覚する変化は？

自分にもっと自信を持ちたい。変らなきゃと思うようになった。ひろばのお母さんと話すようになって影響を受けた。あるお母さんが、私たちくらいのとときの自分を振り返って、“あのとときの自分が居るから今の自分が居る”と言うのを聞いて、共感できた。ママたちは自分に自信を持っている。私もマイナスに物を考える癖を変えて自信を持ちたいと思うようになった。

母親の話を書く体験を通して、自分自身を内省し、自己理解が深まり、自分をより高めたいという目標や将来展望を持つようになっていく。人生の少し先を行く先輩女性として、身近な女性モデルを得ることで、学生が自分の将来像について具体化させていくことができるようになり、内発的な力を引き出されると見て取れる。

・事例D：自尊感情得点+4点と上昇した事例

演習前後で自覚する変化は？

自分が大好きになった。アウンジャに行く前は自分の適当な性格を人からも指摘され、幼稚園の教師に向いていないと自信をなくしていたときに、CR（語り合い）を体験しても、のすごく自分が変わった。私の言うことを否定しないで聞いてくれて、いいところをいっぱい褒めてくれて、だから幼稚園実習も頑張ろうって思えた。実習は辛かった。頑張ってもやってもぜんぜん褒めてもらえず厳しかった。戻ってきてアウンジャのCRでまた語っ

て受け止めてもらった。それで頑張る気が出て、就職も決められた。アウンジャは子育てだけじゃなくて、生きていくのに必要なあったかい場所だと思う。

自尊感情が低く、自分への自信を失って投げやりだった学生が、子育て期の女性を支援するアウンジャという少々異色の子育て支援機関へ出向き、支援者として地域で活動する大人の女性と出会い、ありのままを受け止めてもらう体験を通して自分を見つめなおし、エンパワメントされ、自分への自信を回復して職業選択というこの時期の青年にとっての大きな人生の決定を行っていった。

2) プレゼンテーション内容の分析

プレゼンテーションをした3人は、「まきしまMove」（以下、この節では「Move」と略称する）での演習活動に入る前後での、自分たちのひろばイメージの変化と、気持ちの変化について触れている。

①ひろばイメージの変化について

演習に行く前は、「子育てに常に不安や悩みを抱えている人のいくところで、あまり明るい雰囲気のところではなさそう」「家で子どもと二人でいるのが辛いのでMoveに来る人が多そう」「近所に親しい人がいないので、友達を作りに来る場所」と言うように、どちらかというところとネガティブなイメージが先行していたようだ。しかし、自分たちが企画した保育表現活動を親子と一緒にやることを通して、次第にそのイメージは、「明るくて温かい雰囲気、お母さんたちと色々な話ができる」「親がみんなでお互いの子を見守っている温かい場所」「何気ない会話を楽しむ場所であり、まるで私たちのための学校と同じようなところ」「お母さんたちにとって安心できる場所であるMoveは、

私たちにとっても安心して過ごせる場所だった」というふうに、ポジティブなイメージへと変化していった。

②気持ちの変化について

演習活動前は、「Moveに来る人たちとどう関わったらいいかわからない」「相談されたらなんと答えるのが一番いいのかわからない」と不安が高かった。

しかし、演習終了時には、Moveでの演習で得たものとして次の5つを挙げている。すなわち、1) 幼稚園では見られないような親子の姿を見ることができたこと、2) 乳児の感動的な成長を見て一緒に喜べたこと、3) 幼稚園とMoveのような親子のひろばの違いを知れたこと、4) 自分自身が自然体でその場に居られるようになったこと、5) お母さんたちと笑って話せるようになったことの5つである。

彼女たち自身が、初めて知らないひろばを訪れた親と同じ気持ちを追体験しながら、その場に受け入れられて、ついにはMoveが自分の「居場所」となっていく過程を体験したということ、この記録は表している。子育てする親にとって地域の中に安心していられる「居場所」があることの重要性を、身体知として学んだ意義は大きい。

松永(2005)は、「子育て支援センター」にスタッフの仕事としては、「親子の『居場所』を作ることである」としている。そのための基本的態度として、①評価せずに受け入れること、②子育て事例の情報交換をすること、③交流を見守り促すことの3点を挙げている。

こうしたスタッフの「子育て支援力」があっただけで、Moveが親にとっても居心地のよい居場所となっていくことを学生は身をもって体験したわけである。親の立場に身をおいて共感する能力を持った保育者がこうやって育つことの

意義は大きい。

(2) 研究Ⅱ (参加学生・取り組み等への評価)

子育てひろばの支援者(スタッフ)と利用者(母親)に対し、インタビューによる質的評価の聴取を行った。

1) 子育てひろばスタッフへの聴取

子育て支援活動で実際に関わって頂いた主宰スタッフに半構造的質問形式で、意見聴取を行った。対象は3団体から下記の日時・場所で行った(質問項目一覧は巻末註釈)^{vi}

- 〔赤ちゃんサロン・広場〕2009年8月24日午後：
山城パートナーシップセンター
- 〔アウンジャ〕2009年8月26日午前：パレット
城陽
- 〔まきしまMove〕2009年9月17日午前：まきし
まMove

質問1. 幼稚園教員・保育士養成課程のなかでの「子育て支援活動」の取り組みについて

①単位認定のある科目として組み込んだことは必要であったか

- *演習科目としての位置づけだからこそ意義ある。そうでなければボランティア。
- *必要であるが十分であるためには、2年間のなかで「子育て支援活動」の実習・演習を組み込むことに困難がある。
- *時期的にも学生生活の重要なドキュメント(教育実習、就職活動)に遭遇するなかで、自己防衛(鎧)を脱いでいってくれた。

②必要十分な時間・日数であったか

- *個々人のレベルで相違があったと思う(意識・モチベーション・経験などの差)

* 演習時間が短い。そのため、サロンや広場の準備・開始から終了・反省会・後片付けまで一貫して参加してもらえない。トータルな体験をしてもらって始めて乳児期の母親の様子を理解してもらえる。特に、反省会に出て母親の生の声を聞いてもらえると母親の不安や戸惑いなどが如実にわかったと思う。

* 少人数で数回のセッションで密度濃く取り組めたので、大学（短大）教育課程として、非常に有効だと感じた。

③考慮すべき点として何が残されたか

* コミュニケーションの段階がある。第一段階：場に馴れる。第二段階：子どもと遊ぶ。第三段階：親と話す。

* 参加者は毎回違い、一度きりで来なくなる人もいる。一期一会の場であるからこそ、学生自身が飛び込んでいかないと学びにならない。

* 自己紹介一例をとっても、周囲に必要な情報だけ伝えれば良い。私は何者で何を学びに来ているのか。

* 学生1人で参加する方が学びは大きい。自分で考えて行動する力が付く。

質問2. 利用者（子ども・母親）の反応について

①学生の参加は子どもにとって有効でしたか

* “大きいお姉さん”というイメージ（スタッフでもなく母親でもない）

* 知らない遊びを教えてくれる。特に、3歳児以上が心待ちしていた。

* 若い学生のもつ可塑性の高さを実感できた。

②学生の参加は母親にとって有効でしたか

* スタッフや友人と違い新鮮な存在。

* もっと学生からの積極的アプローチを期待していた。

* 学生の遊びが参考になった。

質問3. 支援者（スタッフ）の目から見て

①学生が参加した広場は有効でしたか

* 母子とも一緒の空間なので、学生が入って空気が変わる。

* 新しい感覚、客観的意見、明るい雰囲気、新しい遊び。特に、手遊びは母親やスタッフにとっても見守り以外の日常の遊びの導入に有効。

* ひろば事業を体験したことは、他に生かせる。保育士として就労した時、母親として自ら出産した時。

* 幼児教育の学びを生かした準備をしてくれた。

* グループワークでの積極的参加で講座参加者へも好影響を与えてくれた。

* 女性のエンパワメントが目的のNPOであるので、若い世代への心理教育的アプローチの有効性が確認できた。具体的には、中高年の女性ではなかなか抜け切れないジェンダー規則から短期間で脱皮しやすい。

②今後も「子育て支援活動」演習を継続すべきと考えられますか

* 学生だけが学習する場に留まらない。共に学ぶ場となった。

* 「子育ては文化」(キッズいわき:岩城氏)⁵⁾。したがって、子育ては伝承していく社会的使命がある。保育者となる、母親となるであろう学生の参加は必要。

* 大学の講義で知識・スキル教育は出来るが、自分の位置は判らない。保護者像や自分自身を見つめる場・機会となった。CR（語り合い）が内面化、焦点化を可能にした。特に課題別のCRが有効であった。大学でも継続してもらいたい。

NPO法人として、文教短大の学生を受け入れ、若い世代への心理教育という新たな使命（ミッション）が得られた。

2) 子育てひろば利用者への聴取

「まきしまMove」利用者の感想文をスタッフを通して頂戴した。

〔7ヶ月の母〕

ママにはない発想で、子どもと遊びができるので良かった。（子どもを）放っておいても色々とかまってくさる。

〔9ヶ月の母〕

初めてMoveに来させていただいて、学生さんたちに親切にさせていただいて嬉しかったです。娘もすごく喜んでいたと思います。また遊びに来たいと思いました。

〔1歳3ヶ月の母〕

初めての紙芝居に興味をもっていました。明るい雰囲気にももらって、楽しそうにしました。

〔1歳8ヶ月の母〕

学生さんの作ってくれたゲームは楽しそうにやっていますが、思っている趣旨と違う遊びになっていたような・・・。

〔1歳10ヶ月の母〕

最初はあまり興味をもたなかったのですが、アンパンマンの絵を見たときに、みんなが食いついて見ていました。（私の子どもは）紙コップを重ねる遊びが面白かったみたいで、よく遊んでいました。紙芝居はまだちょっと早かったみたいですが、好きなアンパンマンだったので、少し興味をもったみたいです。

〔1歳11ヶ月の母〕

1対1で絵本を読んでもらったこともあってか、子どもが嬉しそうでした。集中して絵本を読む姿は、あまり見ないので、本人にとっては

良かったかなと思いました。

〔2歳の母〕

自分が教えてあげられない遊びを教えてもらえる。大きな絵本を見せてもらえたのが良かった（なかなかみれないから）。親は、もっと積極的に関わってくると話しやすい。

4. 全体考察

(1) 研究 I

結果と考察で見てきたように、この演習によって明らかに学生にはミクロレベルで内的心理変化が起きていた。それは以下の5点としてまとめられるだろう。

- 1) 子ども観、子育て観がより現実的になった（子ども理解、親理解）
- 2) ひろばイメージがよりポジティブかつリアルになった（ひろば理解）
- 3) 子育て中の親にとって地域の「居場所」があることの重要性に体験的に気づいた（ひろば理解、親理解）
- 4) 幼稚園教育実習だけでは得られなかった、親への視点、地域コミュニティへの視点を持つようになった（親理解、コミュニティ理解）
- 5) 乳幼児、母親、スタッフとの交流の中で学生は自己理解が深まり、エンパワメントされ、身近な大人の女性モデルを得て自我同一性の獲得が促された（自己理解）

藤後らは（2005）、「子ども理解」「自己理解」「コミュニティ理解」を促すような保育体験を軸とした教育プログラムを作成し、その効果を検証している。本研究では、子どもとの接触のみとなる保育体験にとどまらず、地域の親子の日常生活に密接につながっている「ひろば」体験をしたからこそ、上記3つに加えて、「親理解」

「ひろば理解」の2つの理解もともに促されていったと言えよう。

作業仮説として想定したモデルは現実を反映していなかったといえる。平木（2006）のエコシステムミックなセラピー統合モデルを援用して考えると【図5】に示すように、ひろばにおけるエコシステムミックな相互依存相互交流モデルが想定できるのではないか。

ひろばという場と時間のなかに学生自身もその一部として入り込んで、「時間と空間を共有して他の存在と相互に関わりあいながら成立し、相互依存的相互交流を繰り返している」「その相互作用全体が各部と全体のバランスを維持したり、進化を促したりして共存して」⁶⁾いるのが、ひろばの実態そのものであろう。その中でこそ、その場に居るさまざまな人との相互作用が起これ、ミクロレベルで学生の内的な意識変容が促されていくのである。学生が語った「自分にとっても居心地のいい場所はお母さんたちにとっても居心地がいい」とは、正にその場の構成員としての語りであろう。

特筆に価するのは、当初の仮説【図1】では想定していなかったことだが、青年期の発達課題を抱えた女性である学生が、母親や支援者を身近な役割モデルとして認知し、自我同一性獲得へと導かれ、大人の女性として成長するきっかけを与えられたことである。保育者としての準備や親準備の意義にもまして、なによりもその大前提となる女性の自我同一性の獲得に必要な、妊娠・出産・育児という性役割意識や職業選択の決定、及び健康な自尊感情の形成にこの演習が寄与した意義は大きい。

Erikson（1959/1973）は、アイデンティティ＝自我同一性の感覚を得ることは“自分自身への自他承認の感覚を得ること”だと言う。事例Bが語った、「子どもからも尊敬される自分にな

りたい」、事例Cが語った「自分に自信を持ちたい」事例Dが語った「自分を大好きになった」は、正に自他承認を得る感覚の獲得を意味することばであろう。この演習は、学生たちにとっては、いわば“大人の女性への通過儀礼の洗礼”としての意味合いもあったと言ってよいだろう。

（2）研究Ⅱ

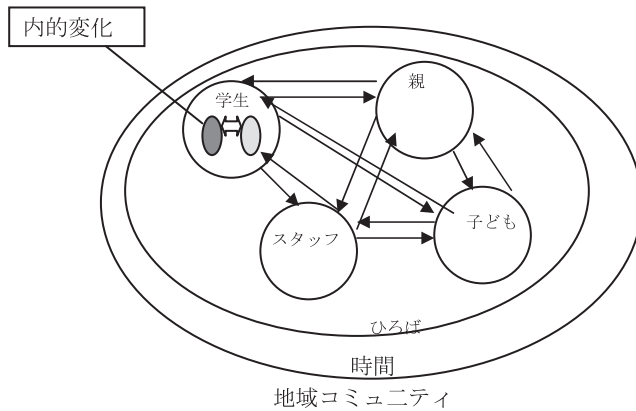
1）支援者からの評価

3カ所共通した意見として出されたのは、学生が保育者への準備性に加えて女性や母親（出産・育児）としての学びの機会となった。育児や子育てが文化であり伝承していかなければならない社会的意義がある。その文脈で地域の子育て支援のひろばで母親や支援者と交流する重要性の3点が提起されている。

学生の参加に関しては、新しい空気が吹き込まれた。親や支援者は学生から幼児教育課程で教習している遊びを知ることができた。子どもたちにとっては“大きいお姉さん”という視角が与えられた。非設定のひろば事業で逆に設定の有効な場面も感じた。と4点が出されている。

一方、2年間の短期大学保育士養成課程という時間的制約や学生自身のモチベーションの違いによる問題点も浮き彫りになった。特に、母親に対するコミュニケーションが十分行われていなかった点が指摘されている。これについては、ひろばにおけるコミュニケーションの段階として、1）場に馴れる、2）子どもと遊ぶ、3）親と話す、と三段階に整理された。逆にそれだけの時間を必要とする反証と考えられる。

他方、アウンジャのような女性の社会自立やジェンダー格差の問題を使命とするNPO法人では、若い世代の教育可塑性の高さや心理教育の有効性が確認された⁷⁾。



【図5】 ひろばにおけるエコシステム的な相互依存的相互交流モデル

2) 利用者（母親）からの評価

出された感想を集約すると、以下のように整理できる。「いろいろな遊びを学べた」「ひろばに来て子どもたちを遊ばせてもらえるので、手が離せられた」「子どもの新たな一面を感じる機会となった」「母親にとってスタッフでも友人でもない。子どもにとって“大きなお姉さん”という存在」の4点である。

本来、子育て支援ひろばは、都市化の具体的な進捗が少子化・核家族化として現出した地域社会において、育児世帯の出会いの場であり、非設定で開かれており、あくまで母子が主役の場である。

しかしながら、学生が新しい空気や遊びを提供し、母親に子どもへの新たな視角をもたらしたり、遊びを伝授し、わずかな時間であってもレスパイト・ケアの機能を発揮する場面があったりと、支援者スタッフとも異なるバイ・プレイヤー（脇役）の役割を果たしたことが表現されている。この「子育て支援活動」に加わった学生も教員も意図しない効果として、子育て支援ひろばの乳幼児－母親－支援者スタッフとい

う三角関係の発展や促進の触媒的役割を果たした【図5】。

同時に、全ての学生にはあてはまらないが、学生の参加は演習でお世話になったゲストではなく、母親（older sister）－女性支援者（oldest sister）－女子学生（younger sister）といった関係に近いシスターフッドを構築する者もみられた^{vii}。

感情労働、身体知が必要不可欠な保育者として、養成過程におけるこうした演習体験は、選択科目としての1教科に留まらない教育効果を見出せたと考えられる。

5. ま と め

「子育て支援活動」演習への参加を通して、学生たちには以下の心理的な変化が生じた。1) 子ども観、子育て観がより現実的に変化、2) ひろばイメージがよりポジティブかつリアルに変化、3) 子育て中の親にとっての「居場所」の重要性を体感、4) 親への視点、地域コミュニティへの視点を得る、5) 乳幼児、母親、支援者との交流を通して自己理解が深まり、自我

同一性獲得のきっかけを与えられた。

1)、2)、3)、4)に関しては、これまでの先行研究でも確認されてきた支援者準備教育及び親準備教育としての演習の意義が本研究においても確認できたと言える。5)に関しては、他の先行研究においては見られなかった知見として社会に巣立つ手前の学生にとって大きな意味を持っていると考える。

大前提となるジェンダー規則に囚われがちな女性の置かれている社会的立場を、若い母親や支援者という先輩女性モデルを得て自覚し、性同一性の獲得と職業アイデンティティの確立、及び健康な自尊感情の形成＝自他承認の感覚という課題を解決することに、この演習が寄与した。

ひろばがコミュニティ^{viii}として機能しており、継続的な学生の参加によって脇役的働きかけが可能となり、関係性が促進される触媒的效果がみられた。

前述したように、子育て支援活動を通じて人生の先輩である母親や支援者と関わることで変容する教育的可塑性の高さを示し、NPO法人の社会的使命やアプローチの仕方に再認識の影響を及ぼす副産物をもたらした。こうした効果は、学内に置かれた子育て支援ひろばや短時間のボランティア体験では得られない。地域で展開されているひろばに、一定期間継続的に演習参加した成果と考える。

教育課程として、今後、子育て支援活動と女性自立支援活動を組み込んだプログラム化・科目設定が新たな取り組むべき課題として浮かび上がった。そのためにも、子育て支援活動の継続が前提となるが、次期(子ども未来コース2期生)の子育て支援活動についての調査研究でより深めていきたい。

謝 辞

本研究に先立って、本学「子育て支援活動」は、総合プロデュースを務められた特定非営利活動法人働きたいおんなたちのネットワーク理事長：吉田秀子氏の功績が大きい。この紙面を借りて厚く御礼申し上げたい。

また、同じく本学「子育て支援活動」実施に関して協定書を取り交わし、ご理解ご協力いただいている宇治市子育て支援室こども福祉課に深く感謝申し上げる。

本研究を進めるにあたっては、調査に応じてもらった子ども未来コース1期生22名。また、特定非営利活動法人働きたいおんなたちのネットワーク理事で、ましまMove責任者の高田悦子氏、同法人理事：橋本久子氏、同じく西村淑乃氏、特定非営利活動法人子育てを楽しむ会理事長：迫きよみ氏、特定非営利活動法人アウンジャ理事長：安本理子氏、同理事成田厚子氏にインタビュー等でご協力頂いた。記して感謝申し上げます。

註釈

- i 例えば、福祉系専門学校1年生を対象とした保育ボランティア体験での意識変化研究では、藤後悦子、岡本エミ子、山本和子「保育体験を中心とした教育プログラムの有効性」国立オリンピック記念総合青少年センター研究紀要 第5号(2005)がある。また、保育専攻短大生を対象としたものでは、三木和子、廣瀬則子「保育専攻短大生の園・自己評価についての実習間比較と一般性自己効力感」保育士養成研究 第22号(2004)がある。中高生を対象とした保育体験については、伊藤麻子「中・高校生の親準備性の発達と保育体験学習」風間書房(2006)に詳しい。
- ii 引用文献1)では、白梅学園短期大学の「白梅子育て広場」、東横学園短期大学の子育て支援センター、高田短期大学の「育児文化研究センター」等、学内

センターとしての特色ある取り組みが紹介されている。

- iii 例えば、石井章仁（2005）「保育士養成校における子育て支援の専門性を培うための体験的学習について—おひさま広場の活動を通して—」保育士養成研究、第23号。
- iv 「対児感情評定尺度」については、花沢成一「母性心理学」医学書院1992を参照。28の形容詞からなる質問紙で、子どもへの「接近感情」と「回避感情」から構成されている。0点から3点までの4件法で回答。接近感情と回避感情の得点の総和を比較する。「子ども・子育てに関する意識」尺度については、前掲伊藤（2006）を参照。「子どもへの親和感情」と「親になることへの受容性」の2因子から構成されている。1点から3点までの3件法で回答し、2因子それぞれの総和を比較する。「自尊感情尺度」については、10項目から成るローゼンバーグ自尊心尺度（山本訳）（1982）を使用。1点から4点までの4件法で答え、得点総和を比較。「不安尺度」については、一般不安尺度を基にして作った花沢（前掲）を参照し、16項目を聞いた。0点から3点までの4件法。今回は不安尺度に関しては分析では取り上げない。
- v 子育て支援センター及びつどいのひろばは、厚生労働省の次世代育成支援対策「子ども・子育て応援プラン」に位置づけられた施策の一つ、「地域子育て支援拠点事業」において、センター型、つどい型として位置づけられている。
- vi 質問項目

質問1. 幼稚園教員・保育士養成課程のなかでの「子育て支援活動」の取り組みについて

- ①単位認定のある科目として組み込んだことは必要であったか
- ②必要十分な時間・日数であったか
- ③考慮すべき点として何が残されたか

質問2. 利用者（子ども・母親）の反応について

- ①学生の参加は子どもにとって有効でしたか
- ②学生の参加は母親にとって有効でしたか

質問3. 支援者（スタッフ）の目から見て

- ①学生が参加した広場は有効でしたか

②今後も「子育て支援活動」演習を継続すべきと考えられますか

- vii 学生のひろばでの母親や支援者との関係づけの深度（ラポールの形成）は様でなく、さまざまであった。学生の側からは、幼稚園教育実習の前後や就職活動に際して、CR（語り合いの場）や母子との関わりを経験したことで、自身の近未来への展望を描いて進路や職場の決定を行う者がいた。つまずきも至らなさも長所を見出してエンパワメントされた経験は、つまり尊重しあう関係を築き、結果として自尊感情の飛躍につながった。就職内定を教員より先に子育てひろばのスタッフに報告した学生もあった。一方の母親にも、学生の子どもへの関わりが自然な形で育児から開放されるレスパイトケアになった。また、母親によっては学生の姿をみて再就職を考えるなどの影響を与えた。支援者にも、各NPO法人としての使命と地域での関わりを再考する契機をもたらした。
- viii 本論で用いる「コミュニティ」は地域社会や地域そのものを指すのではなく、「コミュニティ=人間が、それに対して何らかの帰属意識をもち、かつその構成メンバーの間に一定の連帯ないしは相互扶助（支え合い）の意識が働いているような集団」広井良典（2009）『コミュニティを問い直す—つながり・都市・日本社会の未来—』11頁の定義に基づく。

《引用文献》

- 1) 福井逸子、小栗正弘、滝川光治（2008）『「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究（1）—短期大学へのアンケート調査の分析を通して—』北陸学院大学・短期大学部研究紀要、第1号。
- 2) 竹之下典祥、富田英子、岡本美晴、伏見強（2009）「学生が参画する子育て支援における地域連携」、日本保育学会第60回大会報告集、416頁。
- 3) NPO法人子育てネットワークとかち、下村一、桶水理恵（2004）「保育系短大生の子育て支援体験を通じての意識変容」子育てサークルネット支援事業報告書『みんなで子育て』、国立総合児童センター子どもの城。
- 4) 京都文教短期大学第2回子育てシンポジウム報告書

(2009)。

- 5) 「第8回全国子育てひろば実践交流セミナー inきょうと」基調講演(2009年9月5日)での、講演者岩城敏之氏(キッズいわき代表)の発言。
- 6) 平木典子、野末武義(2000): 家族臨床における心理療法の工夫—個人心理療法と家族療法の統合—精神療法, 26(4)。
- 7) 安本理子「若い人たちとつながる」, コラム『随想やましろ』, 京都新聞2008年11月21日朝刊

参考文献

1. Erikson EH, *Identity and life cycle*, New York: International Universities Press, 1959, 小此木啓吾訳編(1973)『自我同一性』誠信書房。
2. 福井逸子、小栗正弘、滝川光治(2008)「「子育て支援力」育成のための保育士養成教育に関する研究(1)—短期大学へのアンケート調査の分析を通して—」『北陸学院大学・短期大学部研究紀要』第1号。
3. 花沢成一(1992)『母性心理学』医学書院。
4. 原田正文(2006)『子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートに見る子育て現場と子ども虐待予防—』名古屋大学出版会。
5. 橋本真紀他(2005)「保育所併設型地域子育て支援センターの現状と課題」『保育学研究』第43巻第1号。
6. 平木典子、野末武義(2000)「家族臨床における心理療法の工夫—個人心理療法と家族療法の統合—」『精神療法』, 26(4)。
7. 平木典子(2008)『カウンセリングの心と技術』金剛出版。
8. 広井良典(2006)『持続可能な福祉社会』ちくま新書。
9. 石井章仁(2005)「保育士養成校における子育て支援の専門性を培うための体験的学習について—おひさま広場の活動を通して—」, 『保育士養成研究』第23号。
10. 伊藤葉子(2006)『中・高校生の親準備性の発達と保育体験学習』風間書房。
11. 古賀理他(2008)「保育士養成校による子育て支援者養成の展開と課題」『佐賀女子短期大学研究紀要』第42集。
12. 小出まみ(1999)『地域から生まれる支えあいの子育て』ひとなる書房。
13. 子育て支援者コンピテンシー研究会編著(2009)『育つ・つながる 子育て支援』チャイルド本社。
14. 牧里毎治、山本隆、井岡勉(2008)『住民主体の地域福祉論—理論と実践—』法律文化社。
15. 松永愛子(2005)「地域子育て支援センターの役割について」『保育学研究』第43巻第2号。
16. 三木和子、廣瀬則子(2004)「保育専攻短大生の園・自己評価についての実習間比較と一般性自己効力感」『保育士養成研究』第22号。
17. 『臨床心理学』(2004) Vol.4 No.5「特集 子育て支援」。
18. 高山静子(2008)「コンピテンシー理論に基づく保育士養成過程の考察」『保育士養成研究』第26号。
19. 武田信子(2002)『社会で子どもを育てる』平凡社新書。
20. 藤後悦子、岡本エミ子、山本和子(2005)「保育体験を中心とした教育プログラムの有効性」『国立オリンピック記念総合青少年センター研究紀要』第5号。
21. 山本和郎(1986)『コミュニティ心理学—地域臨床の理論と実践—』東京大学出版会。